

朝食会講話シリーズ
vol. 334

尼崎の歴史に関する2、3のエピソード
～歴史分野におけるWeb活用事例から～



尼崎市立地域研究史料館 館長

辻川 敦



尼崎市立地域研究史料館 館長

辻川 敦 (つしかわ あつし)氏

略 歴

昭和 35年 京都府舞鶴市生まれ

昭和 57年 京都大学文学部史学科卒業

尼崎市役所入所、総務局地域研究史料館に配属

以後、史料館において地域史料の調査・収集・整理・

公開ならびに「尼崎市史」等の編集事業を担当

平成 19年 尼崎市立地域研究史料館館長に就任

現在に至る

はじめに

皆さま、おはようございます。

辻川です。よろしくお願いします。

普段は、この会場がある中小企業センターの向かいにあります、総合文化センターの 7階の地域研究史料館で、歴史の仕事をしております。

ですので、今日も歴史に関するお話をさせていただきます。尼崎の歴史についての具体的な話題と共に、史料館では、従来から歴史に関する情報発信を重視しておりますので、そういったことも織り交ぜてお話ししたいと思います。

そのなかでも特に、ウェブの活用についてふれたいと思います。尼崎市役所そのものが、この4月に機構改革を行いまして、「シティプロモーション推進部」という組織を設けました。

シティプロモーションですから「尼崎の魅力の再発見と発信」といったことを重視して、従来以上に情報を発信していこうという事に取り組んでいます。

当然、そこには「歴史」の分野も入ってきますので、私共も従来以上に情報発信していきたいという事なんです。

ところで、シティプロモーションという事をひと言で言うと「尼崎の魅力の情報発信」、もっと平たく言えば「尼崎らしさ」の発信です。では皆さんは、「シティプロモーションすべきニ崎らしさ」、情報発信すべきものは何だと思いいになりますか。

「寺町」でしょうか、「近松」でしょうか、或いは「メイドインニ崎」で取り上げているような、尼崎の工業製品や名産品でしょうか。

そういったものも、このシティプロモーションの王道と言いますか、一番取り上げるべきものだと思います。

でも、私はもう少し違うテイストのものにも「尼崎らしさ」を感じるのですね。

例えば、人物なんていうのはどうでしょう

これもよくあると思うんですが、その地域所縁の出身の人とか、縁の深い人を取り上げて、地域を象徴するような人としてタイアップして情報発信していくというのは、各地で取り組まれていますね。

以前にも今日と似たようなテーマで、尼崎の街づくりを考える市民団体から呼ばれて話をしたことがあります。

その時も、尼崎の歴史的な地域資源と言うんですか、情報発信すべきものは何だろうというようなことを

お話をしたのですけれど、その時に人物も取り上げてみようかと思って、少し考えてみました。

尼崎所縁の人物

尼崎所縁のプロスポーツ選手、どんな人がいるのかなと考えたんですけれども、よく考えてみると、とてつもない桁外れのプロスポーツ選手が四人いることに気づきました。

誰か分かりますか。

まず、野球では阪神の二人のエースですね。

村山実さんと江夏豊さんは、お二人とも、尼崎生まれではないのですが、野球選手に育っていく少年時代を尼崎で過ごされました。

村山さんは、今の尼崎産業の前身になる住友工業高校という学校に通っておられて、JR尼崎の北側、潮江に住んでおられました。

江夏さんが住んでいたのは塚口の東側辺り、園田地区になるんですかね。

学校は大阪だったようなんですけれども、

お二人とも野球の練習をはじめて、うまくなっていった時期は、尼崎におられたわけです。

お二人の実績については、みなさんよくご存知だと思います。

それから、サッカーの釜本邦茂さんですね。

釜本さんは、今のセレッソ大阪の前身にあたるヤンマーのチームに所属していました。ヤンマーは今も長洲に工場もグラウンドもあると思いますが、あの場所でも練習されていたそうです。

ネルソン吉村という、ブラジル出身の選手とコンビを組んで、ネルソンさんはその後ずっと尼崎で少年サッカーの指導をされたようなんですけれども、その選手とともにヤンマーのサッカーチームの歴史のうえで非常に実績を残した人です。

もう一人います。その人はまだ現役です。

誰か分かりますか。

伊達公子さんですね。

伊達さんは園田学園の高等部のテニス部出身です。

園田学園はテニスとソフトボールが全日本クラスで、非常に名門校なんですね。

伊達さんもそこで練習をされて、当時のコーチが目のある人だったそうで、伊達さんが高校を卒業するときに、「あなたは日本で学生スポーツをやっても、あなたの為にならないから、プロスポーツ選手になりなさい。プロになって世界で勝負をきなさい」と言われて、ああいう道を歩んだと聞いています。

最高で、世界ランキングで4位になっています。

ウインブルドンで、全盛期のシュテフィ・グラフをもう少しで破るところまでいった伊達さんが、元々は

園田学園のご出身ということなんです。

ですから、こういったプロスポーツ選手が四人おられて、四人ともものすごい実績を残した方です。

村山さん、江夏さん、釜本さんは、生まれた時代が早すぎたんでしょね。

この三人が、伊達さんや野球の野茂選手、或いはサッカーの中田英寿選手なんかと同世代だったら、伊達さんと同じように世界に羽ばたかれて、遜色のない実績を残されたのではないでしょか。

そけだけじゃなくて、私はこの四人を見ていますと、やっぱり尼崎らしいなと思うんです。

何か、人間としての陰影があるというんですかね。

成功ばかりじゃないと思うんですね。むしろ挫折とかつらい部分とか、人間としての陰影みたいなものあって、それがまた人間的魅力とか、スポーツ選手としての大ききさみたいなものに繋がっているんじゃないかと思うんです。

そういう人を生み出すって言うんですか、例えば江夏さん、村山さん、ものすごい選手ですけども、一方で王、長島とはやっぱりちょっと違うんですね。

そういう何か陰のような部分もあって、尼崎らしいなと思いますし、もうひとつは、そういう人が四人出身なんだけれども、あまりそういう四人が尼崎に所縁があってということを世間に知られてないし、情報発信にも、今のところはまったくされてないわけじゃないですけども、産業高校にいったら村山さんの銅像がありますけれども、あまり尼崎というイメージと結びついていないところも、また尼崎らしいのかなという風にも思います。

でも、他所では我田引水というのか、ちょっとでも繋がりのある人を「この出身だ」といって、無理やり情報発信に結び付けるケースも多いように思いますので、それに比べると奥ゆかしいわけです。でも、実はこういう所縁の選手がいるという、それも尼崎らしいのかなという風に思っています。

今日の会場におられる皆さんの顔ぶれを見ていると、私よりの年上或いは同年代の男性の方が多いので、1970年代、80年代の野球の話とか、90年代のサッカーの話とかしたら、私は1時間でも2時間でも喋りますし、その方が受けそうな気がするんですけど、ここは尼崎クラブですので、次にはもう少し尼崎クラブらしい歴史の話をしように思います。



その前に、村山さんの写真をちょっと

潮江時代ですね。住友工業の時代。

菅原勝美さんという一緒に野球をされていた方がお持ちだった、村山の少年時代の写真です。

座っている三人のうちの真ん中が村山さんです。

あんまり体が大きくなかった人ですけども、野球を練習され始めた頃の写真です。

人物の話はこれ位にして、もう少し歴史そのもの話をしたいと思います。

こういう場に呼ばれて、よく「尼崎地域の歴史の話をしてください」と言われるんですね。

もっと狭いエリアの話題、たとえば「武庫地区の話をしてください」とか、いろいろなリクエストをいただきます。

地名の由来

そういう場合、私はしばしば地名の話から始めるようにしています。

地名は、その地域の歴史を映す鏡という風に言われます。由来が分からない地名も多いのですが、由来がある程度推測できる地名を見ていくと、その地域の成り立ちがよく分かるんです。

例えば、この会場の場所は「昭和通」ですね、町名改正が行われる前は大物村の一部でした。大物村と言うのは、集落がここより先ずっと東側にあって、このあたりは村の土地の西の外れだったようですが、今は「昭和通」という名前になっています。

では、ここは何故「昭和通」なのでしょう。

実は、表を走っている国道2号線は、元々「阪神国道」と言いました。この通り沿いにできた街なんです。

「阪神国道」、国道2号線は、昭和の初年に開通しました。

それまでは、東西の幹線道路というと、この辺りでは「旧中国街道」と言われていて、今の琴浦通りとか、あの辺がそうですね。

琴浦通りも、今は当然拡張されています。

昭和の初め頃であれば、道幅が二~三間と言われていましたから、6メートルない位です。

自動車が対面通行できないくらいの街道でした。

もともと江戸時代の街道ですので、大阪の北から北上して神崎川を神崎で渡って、神崎からまた南下してきて尼崎の城下町に入る。

そこから西に兵庫とか西国方面に向けていく街道です。

それが幹線道路だったわけです。

そうすると、段々自動車交通が発達してくるので、そういう街道ではチョッと狭いということになるわけです。東西交通で言うと、鉄道は明治7年に官線、今のJR神戸線が通っています。

明治の終わりには阪神も通るのですけれど、道路の方は旧態依然としたものだったので、そろそろ東西の幹線道路も必要だろうということになって、大正期に国策の都市計画が立案され、これに基づいて造られたのが新国道である「阪神国道」だったわけです。

それが昭和のはじめに開通して、その時に周辺の町もできたので「昭和通」という地名が付いています。

この辺りもそうですし、もっと西に行って、「昭和通」或いは「神田北通」「神田中通」「神田南通」と、国道2号線に沿ってかまぼこ型に街が広がっていますね。

それから、北側に行くと難波の住宅地があります。

難波の方はかまぼこ型に平行ではなくて、斜めに道が切ってあって、斜めの道が国道2号線に合流していくような形になっています。あれも都市計画、区画整理によって、大正期に阪神国道が通るのに合わせて計画的に造られた街です。

ですから、今も南側は繁華街で北側は住宅地になっていますけれども、そういう街も道路交通や都市計画に合わせてできていくわけで、その歴史が「昭和通」という地名にも表れているというわけなんです。

もう少し広域に目を向けて、「尼崎」という地名はどうでしょう

現在は、「尼崎市」という自治体の名前になっています。

伊丹市の南で、武庫川と猪名川、神崎川に挟まれたエリアです。

でも、もともと「尼崎」と名付けられた場所はもっと狭いエリアです。この会場に比較的近い、少々南に下ったあたりがそうです。

この図のなかの、阪神大物駅と尼崎駅の間の南側、今は「城内」という「ちょうど尼」の字にかぶさって四角が描かれています。あの辺が「城内」ですね。

明城小学校とか、市立文化財収蔵庫なんかがある場所です。

あの辺りが、一番最初に「尼崎」という地名が付いた場所です。

大物の南に尼崎。

ここは江戸時代には城下町になります。近代に入ると、城下町を中心に「尼崎町」とい自治体が明治22年につくられました。

更に、大正5年に市制が施行されて尼崎市になります。

その後は、昭和1年に小田村と合併。1年に武庫・立花・大庄と合併します。

戦後に園田と合併して、現在の尼崎市域になるんですね。

そうやって「尼崎」と呼ばれる自治体の範囲が広がっていくのですけれど、もともとはこの場所が「尼崎」だったわけです。

私はいま武庫町に住んでいますが、武庫地区に住んでいて、他所の人に「尼崎市に住んでいます」とは言いますが、でも「尼崎に住んでいます」とはあまり言わないですね。

武庫町は武庫之荘とはちょっと言いにくいんですけども、あえて言えば「武庫之荘に住んでいます」と言いますね。

塚口に住んでいたこともあるんですが、その時でも「塚口に住んでいます」と言いますね。

「尼崎市に住んでいます」とは言いますが、でも「尼崎に住んでいます」とは言わなかったと思います。

今でもそうですね、市役所の職員の符牒で、飲みに行くときに「尼崎に飲みに行く」というのはこの辺り、中央の辺りとかに飲みに行くことです。

JR尼崎の辺りに飲みに行くときは、あまり「尼崎に飲みに行く」とは言わないですね。

現代人はどうしても駅のターミナル中心に生活をしているからそうだとすることもありますが、その一方で言霊と言いますか、もともとの場所に引っついて



「尼崎」は「尼崎」、「武庫」は「武庫」という風になっているのではないかと、いう風に思われます。

古文書に見る尼崎の地名

もともと「尼崎」といった場所はここなんですが、我々が地名の由来とか語源とか、それと歴史の関わりを見ていくときに、最初に「尼崎」なら「尼崎」という地名が登場した古文書は何なんだろう、どんな風に出てくるんだろう、それはいつの時代なんだろうということを見ていきます。

「尼崎」の場合はすごくシャープにはっきりしてしまっていて、「真福寺文書」という名古屋の真福寺というお寺、そこが文庫を持っていて、昔から古文書を随分集めているお寺なので、このお寺が集めている「真福寺文書」というものがあります。

その中に「大物浜・長洲浜請文」という鎌倉時代の初期の古文書があります。大物や長洲がまだ海

浜だった時代、要するに、この辺りがまだ海岸部に近かった時代に、土地の領有の争いがあった、それを記録した古文書のひとつです。

ここに、「尼崎」という地名が、歴史上知られているところでは初めて登場します。

こんな風に書かれています。

「尼崎浜は大物以南、川を隔て、久安以降の新出の地なり」という風に書かれています。

こういう書かれ方をする文書も珍しいですね。

普通は、地名というのは突然ぽんと出てきて、いつ頃できた土地だと書かれている古文書はすごく親切な古文書というか、この古文書で土地の成り立ちが推測できるので、地名研究にとってすごくおもしろいというか、親切な地名なんですけれども、こんな風に書かれているわけです。

「尼崎浜は大物の南」、大物という土地の南にあたる、ということですね。

川を隔て、久安以降の新出の地なり、久安というのは、西暦1145年から115年です。

いま大河ドラマで「平清盛」をやっていますけれども、源平の争いはこの久安に続く12世紀後半に本格化します。1180年代が源平の争いの盛りで、その後に鎌倉幕府が成立します。

つまり、この「尼崎」という土地は源平の争いの直前、平安時代の末頃に新たにできた土地ですというところが、鎌倉時代の初期の古文書に書かれているわけです。

先程の図に戻りますと、大物と尼崎の間に川が描かれていますね。

この図は中世、戦国時代くらいの推定図なんですけれども、ここに描かれている川は「大物川」といって、今はもうこの川はありません。

でも、高度成長期頃までは、大物川は存在していました。

高度成長期にドブ川になって埋め立てられてしまって、今は「大物川緑道」といって、阪神大物駅を降りたら、駅の東側からずうとうねるような形で、一連の緑地公園が続いています。

それは川を埋め立てた後、公園にしたんですね。

これは、尼崎の公害問題のひとつに地盤沈下ということがあって、戦前から戦後にかけて地盤沈下が起こり、市域南部に海水面より低いゼロメートル地帯が広がりました。このため、南部の川は自然には流れなくなってしまい、水質汚濁が進んだわけです。

庄下川も一時非常に汚かったです。

庄下川は昭和の終わりから平成の初めにかけてかなり改修工事が行われました。庄下川を埋め立てるわけにはいかないの、河川として整備をして大分きれいになりました。

かつての大物川はドブ川になってしまって、流れないから水質が自然浄化されず、それで埋め立てて緑道になりました。もともとは、大物と尼崎の間を隔てる川でした。

さっきの古文書は、そういう事を言っているわけです。

「大物の南に、久安頃に新たに土地ができました。それが尼崎です」という土地の成り立ちが説明さ

れている訳なんです。

この推定図は、戦国時代頃の様子を描いていますから、尼崎が最初に誕生した平安の終わり頃からすると数百年経っているわけですが、それでもまだ尼崎は島状に描かれていますね。

島のような土地、新しくできた島が港町になった、ということになります。

では次に、何故「尼崎」という地名が付くんだろうということなんですが、そのヒントも、古文書や古記録を使った地名研究によって得ることができます。

先程の鎌倉初期の「大物浜・長洲浜請文」には、女性のお坊さんの「尼」の字を使っていて、今も地名にはこの同じ字を使っています。しかし、中世の古文書のなかには、「海士崎」あるいは「海人崎」と書いている場合があります。これも同じ「あまがさき」という地名をあらわしています。

こういう違う漢字を使った地名表記というのはめずらしいことではなくて、近代に入る以前は、地名はいろいろな字を当てて使っているケースがあります。

日本人の癖と言うんですか、近代に入るといろんな字を当てるのはよろしくないということで、ひとつの文字に固定していきますけれども、固定されてるまでは、結構いろんな字を使っています。

「尼崎」もそうですね、こういう書かれ方もしていました。同じ地名です。

しかし、「海士崎」や「海人崎」の方が、元々の意味に近いのかなという風に考えられています。と言うのは、「海士」と書いて「あま」。

これは古代中世の言葉では、海で生計を立てる人のことです。

漁民とか海民とか、今でも海に潜って貝を獲る女性のことを「海女（あま）」と言いますね。

現在は女性に限定して使っているみたいですが、元々の日本語では女性に限れません。

男性を含めて、漁民とか海民のことを「あま」と呼んでいました。

「崎」は「岬」にも通じる言葉で、海に突き出た土地のことです。

そうすると、「海士崎」というのが、この土地の成り立ちにすごくよく合っているわけです。

北にある大物も港町です。大物は謡曲「船弁慶」で、義経と弁慶の船出が描かれていることから分かるように、平安時代には既に港町になっていました。当然漁業もやっています。

その南に新たにできた浜なので、最初に住みだすのはやはり漁民・海民です。

そこから中世の港町になっていきます。

それから、土地の形を見ますと、右下にたなびいていますね。

大物もそうです。海流に沿って右下にたなびいていて、海に対して突き出ています。

ですので、「海士崎」=「漁民・海民が住む海に突き出た場所」という風にとらえれば、すごく土地の成り立ちに合うわけですね。

ですから、「海士崎」「海人崎」がおそらく語源、地名の由来を反映した書き方なのでしょう。とはいえ、早い時期から女性の坊さんを意味する「尼」を使った書き方も登場していて、やがてそちらの方が優勢になって、歴史的には定着したという風に考えられます。



この地名が、近代の自治体合併と共に範囲が広がって、いま現在の尼崎市域にこの地名が付くようになったわけですが、私は、これもまたなかなかうまくしたものだな、という風に思っています。

自治体名となった「尼崎」という地名自体、非常に情報発信すべきものというか、含蓄のある地名だと思ふんです。

というのも、さきほど大物の南にできた「尼崎」という島の成り立ちをお話しました。

では、何故このように右下にたなびくような島ができたのかという事なんですけれども、それはこの「尼崎」という土地だけではなくて、現在の尼崎市域全体に繋がってきます。

尼崎の土地形成

尼崎という土地は、地質学的に見ると、実は非常に新しい土地です。弥生時代頃の海岸線は、現在の地図で言いますと、JR神戸線や阪急のラインあたりだったんです。

これより前、縄文時代は、尼崎はほとんど海の底でした。

何故かと言うと、縄文時代は今より先温暖な時代でした。

地球は非常に長いサイクルで温暖化と寒冷化を繰り返しています。

温暖化すると、極地の氷床・氷とかが溶けて、海水が増えるので、海水面が上昇します。

縄文時代は温暖だったので、海水面が上昇して、「海が進んでくる」と書きまして「海進」と言いますが、「縄文海進」と呼ばれる現象により、海岸線は伊丹台地の南の端あたりに位置していました。

弥生時代以降、若干寒冷化をしています。そうすると逆に「海退」といって、海岸線が退いていく現象が起こります。

弥生時代には、この図に示したあたりが海岸線になります。「田能」がここですね。

「田能」は今では随分内陸部ですけれども、この時代ですと、むしろ猪名川の河口部分に近い。

そういう場所なので、水も多いし、海の幸、野の幸もとれるし、混合経済で、弥生時代当ても暮らしやすかったのが、大規模な集落ができました。それが「田能遺跡」となって、今に伝えられているわけです。

ここから、寒冷化と共に土砂が堆積して、古墳時代・奈良時代と、だんだん海岸線が南に下がってきます。

そうしますと、土地の形成が、ここはちょっと突き出てますでしょう、武庫川の河口部分。

武庫川は土砂を非常に多く運ぶので、それが堆積します。かつては洪水が多い荒れる川でして、土砂が氾濫によって広がって、ああいう海に向かって突き出た形に堆積していきます。

猪名川・神崎川流域の方は、川は緩やかなので、川が運ぶ土砂よりも、むしろ海流、大阪湾の潮流が運ぶ土砂の方が多く堆積します。

そうしますと、武庫川流域みたいに突き出ずに、海岸線に沿って横長の島状に堆積していきます。

ちょっと違うタイプの、尼崎市域の微地形を表した図をお見せします。ここが尼崎の城下町ですね。

尼崎がここで大物がこれです。

もう少し北側、長洲のラインを見ていくと、東長洲・金楽時・西長洲、庄下川をはさんで東難波・西難波と、東西に黄色い帯状のエリアがあって、集落がつかっています。

黄色い色は「砂堆」といって、砂が堆積した場所で、ある時代の海岸線にあたります。

青で示しているのはかつての流路、河川の流れです。

要は、大阪湾がこう巻いてますね。

大阪湾の形に添って、時計回りに潮流がぐるぐる廻っている訳です。

その潮流が大阪湾岸一帯の多くの川から流れ込む土砂を運んでいるので、海岸線の後退と共に土砂が堆積をして、ある時代にこういう島状になっていきます。

島状の土地が段々繋がって行って陸地化し、新たな海岸線となっていきます。

それが、ある時代はこの潮江辺りのラインで、ある時代は難波とか長洲のラインで、平安時代の終わり頃にはこの尼崎のラインにあたっていました。

先程の古文書は、そういう土地の成り立ちを表現していたわけです。

ですので、潮の流れにしたがって大物も尼崎も右下、南東方向に岬状に突き出ている、このうち尼崎は、久安年間に新たに島状の土地として生まれたんですよ、ということが書かれていた訳です。

こうして見ていきますと、時代と共に土砂が堆積して、新たな海岸線ができて、海岸線だけではなくて土地が生まれて、それは田畑だったり、或いは港町だったりする訳ですけども、そういうメカニズムによって「尼崎」という土地ができてきましたという風に考えれば、もともとの「尼崎」の成り立ちを表す地名としても非常によく分かりますけれども、尼崎市域全域の土地形成にも非常によく当てはまるのではないかと。

それが自治体の名前になったというのは、なかなかよくしたものだ、という風に思っているわけです。

史料館からの情報発信

ここまでの説明のなかで、何枚かの図を示しながら説明してきました。こういう図は何に載っているかと言いますと、たとえば海岸線や砂堆を表示した微地形図は、尼崎市制90周年を記念して平成18年度に刊行した『図説尼崎の歴史』に掲載されたものです。

『図説』ですので、ビジュアルに作っています。

加えて、土地形成の歴史などに力点を置いて編集しました。

というのも、いま私がお話したような事は、史料館に問い合わせられる市民の方からよく聞かれる事なんですね。

うちの史料館には、市民の方とか研究者の方とか、さまざまな方が調べに来られます。

こういう風に土地ができて、その結果、土地の性格特徴がこうなので、そこでこんな風な歴史がありますというようなことは、皆さんよく関心を持たれますし、我々もそんな風に解説します。

そういう関心事を反映した市史という事で、この『図説』を作りました。

この『図説尼崎の歴史』は、今年の夏にウェブ版も公開をしました。

尼崎市公式サイトや史料館のサイトのトップページにバナーを置いてリンクを張っていますから、ぜひご覧いただけたらと思います。

このウェブ版は、園田学園女子大学の皆さんに作っていただきました。

業者さんに出して作っていただいたらよいのでしょうけれど、本市は現在財政健全化期間中でして、予算的な制約もあります。その一方で、「協働」ということを市の事業を進める基本として謳っていますので、市内の大学との協働によってウェブ版を作ろうということで、園田の学生さん達がんばってくださって、シンプルな作りですけど、なかなか使い勝手もデザインも良いサイトができました。

市史というのは、むずかしい本として敬遠されがちです。それで、この『図説尼崎の歴史』という本自体、我々としては読みやすく親しみやすいよう工夫して作ったつもりです。

それをまたウェブ版を作って公開するということは、あまり他所の自治体はやっていないので、是非お使いいただけたらと思います。加えて、史料館サイトのトップページからはまた別のサイト、"apedia" アペディア、ウェブ版尼崎地域史事典へのリンクバナーも貼っています。

「apediaのもとになっているのは、『尼崎地域史事典』という平成8年に出した本です。

いわば尼崎の歴史事典で、これもまたウェブ版を作りました。

こちらは史料館の嘱託職員が自力でデータベースを開発をして、平成18年にウェブ公開しました。

こういうものを公開している自治体も、私が知っている限りでは、日本中で今のところ尼崎市しかありません。

こんなページですね。

既に使っていただいている方もいらっしゃるかもしれませんが、ウィキペディアの尼崎版、といった感じ
です。

検索窓に、検索したい言葉を入力していただく形になっています。例えば先ほど村山実の話をしまし
たが、「村山実」と入れていただくと、こんな風に村山さんの項目が出る。

先ほどご紹介した写真も貼り付けてあります。

こういうウェブ上のデータベースのいいところは、更新していける事ですね。

本は一度出したら終わりなので、実際誤植もあって、あとから「しまったなあ」と思うこともあります。誤
植だけではなくて、時代を経るにしたがって項目の追加も必要になってきます。

でも、本の場合にはなかなか改訂版の増刷などはできないのですが、こういうデータベースにしておけ
ば、後から追記をしたり項目を増やしたりできます。

とは言え、多くの仕事があるなかで、いつも "apedia" の項目を増やす事ばかりはしてられないので、
なかなか追いつきません。村山実は、たまたま関心のある職員がいて頑張ってくれましたけど、例
えば歴代市長で言うと篠田市長までしか載っていません。現存の方は原則として項目を掲載しないこ
とにしていて、故人を取り上げることにしていますので、そろそろ野草さんと六島さんを載せないとけ
ないわけですが、まだ原稿を作ることができていません。

そもそも「阪神・淡路大震災」とい
う項目がまだないんですね。

刊行物版の『尼崎地域史事典』を
出したのは平成8年でしたので、ま
だ「阪神・淡路大震災」について書
ける状態ではありませんでしたが、
もう10数年もたつわけですから、そ
ろそろ項目を作らないといけない
など。そんな事で、日々更新を心が
けております。



もうひとつ、最近史料館で心がけている情報発信の事例で、やはり館公式サイトトップページからリ
ンクを張っていますので、よければ見ていただいたらと思います。このリンクは、国立国会図書館の「レ
ファレンス協同データベース」というサイトに飛ぶようにしてあります。

「レファレンス協同データベース」というのは、国立国会図書館が用意した、主として図書館相互のレ

ファレンス情報共用のためのサイトです。史料館も去年の12月から、これに参加しています。

このデータベースに、12月以降大体二週間に一件の割で、レファレンス事例を公開しています。

史料館は専門機関ですし、多くの市民の方からすると、どういサービスを提供しているのか分かりにくいところがあります。

これに対して史料館としての情報発信を強化していく必要があるということで、国会図書館が用意してくれた公開データベースを活用しているというわけです。

最近このデータベースに載せた、史料館のレファレンス事例をご紹介します。

これはトピックスの話題でもあるのですが、平清盛が兵庫の福原京に行く際立ち寄った「寺江亭」を記事にしたいので、概要と資料を教えてくださいというある民間の広報誌から問い合わせがありました。

それに対して、どうい文献を参照して、どう答えたかとい事例をここで紹介しているわけです。

「寺江亭」というのは現在の今福、シオノギ製薬の北側にこんな石碑が立っています。

藤原邦綱とい清盛の盟友がいます。

そろそろ今の大河ドラマでも邦綱も登場するのかもしれませんが、その邦綱の別邸が、いまの今福の辺り、神崎川の河口に近い場所にあったのです。

平氏政権の一門がいるのは、もちろん京の都です。一方兵庫は、清盛が開発した港で、もうひとつの拠点です。

一時期は兵庫の福原に都を移したこともありましたが、しばしば京と兵庫の間を行き来していました。

そういう時は、この尼崎辺りまでは神崎川を川舟で下って来て、ここから兵庫へは陸上交通で行くことが多いようです。

その際、こちら辺でしばしば一泊するわけで、その場所としてよく使われたのが、邦綱別邸である寺江亭でした。

清盛をはじめとする平氏一門、安徳天皇や後白河法皇なども滞在した事があります。当時の記録に、そういう記事が書かれています。

ですから、問い合わせて来られた広報誌も、清盛のドラマに引っ掛けて紹介したかったのだと思います。

それで、皇族や平家一門が寺江亭に来た話はどうい記録に載っていて、それはどうい刊行物で調べることが出来るのかといことをレファレンスして、その内容を国立国会図書館のデータベースに公開しているわけです。

もうひとつの事例で、同様のものを求められるケースがよくあるレファレンス事例です。塚口のサンサン

劇場さんが、「ALWAYS三丁目の夕日 '64」という映画を上映されるのに際して、1960年代頃の時代の塚口とか尼崎の様子分かる写真パネルを展示したいので、そういう写真を複写したいという問い合わせをいただきました。

それに対してどう答えたかという記録です。

個人でも団体でも、昔の生活の様子とか、地域の変化が分かるということで、写真を求めて来られるケースはしばしばあります。

史料館では市の刊行物や市民の皆さんがつくられた地域の歴史写真集なんかも何種類か備えていますし、そういう写真集の編さん過程で集められた写真なども、多くご提供いただいて公開しています。

先ほどの村山さんの写真も、そういった日常の写真収集のなかでご提供いただいたもののひとつです。

ですから、サンサン劇場さんからの問い合わせの際にも、何冊かの写真集から流用できる写真があったので、複製を提供しました。

加えてサンサン劇場がかつて塚口東映と言っていた1960年代前後に作っておられた映画チラシを当館で入手し保存していたので、これも複製を提供しました。

他所のサイトから取ったので、ちょっと絵が粗いんですけど、サンサン劇場さんは当館が提供した画像を使って、ホールでこんな展示をされました。

こういったことに、史料館の所蔵史料を活用していただいています。

これは一例ですけども、必ずしも歴史研究とか勉強目的ばかりでなく、民間事業者の方が営業目的でこういう展示をしたいとか、現実的な利用目的の場合も含めて、いろいろと史料館を利用していただいています。

皆さんも、歴史を学んでみたい、あるいはさまざまな理由から歴史に関する資料や情報が必要になったときは、ぜひ史料館をご利用いただけたらと思います。

最後に、これはちょっと宣伝なんですけど、先般こういう本を出しました。

神戸新聞総合出版センター「のじぎく文庫」からの出版物で、『神戸～尼崎 海辺の歴史』という本です。私も編著者として名前を連ねており、一文を書いております。

神戸と尼崎の臨海工業地帯の歴史の変遷と言いますか、ふたつの地域が、日本の戦前、或いは戦後の高度成長期まで、日本経済を牽引する重化学工業地帯になるのですけれど、何故そうなったのか、何故それ以降若干停滞するのかというようなことを書きました。

難しい本と言えば難しい本なのですが、阪神地域という枠組みで地域をとらえたいということで、古

代から現代まで多くの執筆者のご協力を得て、こういう本を作りました。

我々は自治体の枠組みで仕事をしており、どうしても「尼崎市」という枠組みにとらわれ過ぎてしまふところがあって、もっと広域的に見ていきたい、ということが出発点です。

ご関心をお持ちの方は、ぜひお手元にとって見ていただければと思っております。

少しまとまりのない話になりましたけれども、以上で今日の私の話を終わらせていただきます。

有難うございました。

豊かな地域づくりのお手伝い。
〈あましん〉

地域の**文化**・**教育**・**環境**など、
元気な地域づくりに貢献します。

尼崎21世紀の森づくりを支援します。

※あましんは兵庫県と協定し「企業の苗木の里親第1号」としてスタートしました。

 **尼崎信用金庫**
AMASHIN
<http://www.amashin.co.jp>

